

## 防災グッズ大賞 ~ライフスタイルを変える~

一般社団法人災害防止研究所 代表理事 吉田明生

### 目的と狙い

一般社団法人災害防止研究所は、防災意識を普及するという目的を掲げて2018年8月1日に設立し、災害時の行動や防災についての啓蒙活動を行っている。

防災グッズ大賞は、研究所の活動の一つで、優れた防災グッズを発表し、災害への備えを訴える場として設けたものである。

### 防災グッズ大賞

生活、防災サバイバル、備蓄、住宅関連、衛生関連、食品、その他の部門に区分して、「日常生活で役立つなければ、決して災害時に使われることはない」「楽しく使われなければ長続きしない」という考えのもと、主として家庭で必要とされる防災グッズを選定している。

あわせて、災害防止研究所が防災上の意義を認めたグッズやサービスに認証ロゴを発行している。



防災グッズ大賞2022への参加募集中(2/1~7/15)



### 防災に対する問題意識

東日本大震災後、防災の考え方が抜本的に見直された。2013年には国土強靱化基本法が制定され、国土強靱化計画を日本のいわば国家百年の計に位置づけ、国を挙げて防災・減災を推進することとなった。

その一方、防災の原点とも言うべき領域にある個人の「自助意識の普及」と経済社会活動の中心を占める「企業力の活用」は、国の統制力を発揮できないことから、今後の課題として残されていた。

また、研究所の設立構想を練っていた2015年当時、防災への取組みは盛んになりつつあったが、どちらかというと「万が一」の事態への「対処」に焦点が置かれていた。

災害は“いつやってくるかわからないもの”ではなく

“いつ来てもおかしくないもの”であるし、災害の歴史は日本の歴史そのものなのだから、よりポジティブな考え方をしていきたい。そう考えた。

防災意識を定着させるには、永く続けなくてはならない。ボランティア活動では長続きしない。災害の時代を先取りする先見性、社会的な広がりのある発想、それを実現するための発展性がなくてはならない。

私たちは「防災」という課題を前に、未だ誰も手を着けてこなかったブルーオーシャンが広がっている「自助意識の普及」と「企業力活用」という課題に取り組むことにした。

「防災」の本義に立ち返って自然災害と人災を包含した「災害防止研究所」の名を採用するとともに、災害を克服して日本の成長と発展に結びつけるのだという気持ちを込めて活動の愛称を「まあいい日本プロジェクト」とした。

そして、「防災グッズ大賞」は始まった。

### 防災グッズ

使い難いものや、日常生活で役に立っていないものが、万が一の時に役立つことはない。

防災グッズには災害の教訓が活かされ、さまざまなアイデアや創意工夫が取り込まれているから使いやすい。優れた特許技術やアイデアはそれだけで将来性と価値がある。機能的に優れたものには、楽しさや美しさという魅力が備わっている。

便利な商品は、間違いなく、日常的に利用されるようになり、ニーズに適っているものはどんどん改善され、より広まっていく。

結果として、防災意識が高まり、安全安心が広まることを期待している。

具体的に、防災グッズ大賞の性格が現れている受賞商品を紹介したい。

「全身反射ポンチョ」は、被災時早期発見(72時間以内)の必要性を考慮して開発された。反射効果を極めて大きくして発見されやすくし、約20度の遮熱効果と通常のカサの100倍の耐水効果で生存可能性を高くしている。

防災グッズ大賞の一番の好物は住宅である。

大津波が押し寄せて引くまでの時間、約3時間を生き



全身反射ポンチョ



リストミスト



スフェラー

防災グッズ大賞受賞商品

残るためのシェルターを備えている「防災住宅」は、自宅を最高の避難所にするというコンセプトの下、徹底して生存の可能性を追求した。高気密、高断熱にしたことによりより快適な生活空間を確保した。

「リストミスト」は、コロナ環境下で、何度も繰り返し手の消毒をしなければならない医療関係者らのニーズに応えたものである。手首に装着した軽量小型の殺菌スプレーで、市販の除菌液を補充して約400回使用することができる。殺菌の必要がある度、目の前で直ちに消毒することで、安心感を与える効果もある。

災害時に不可欠なものが照明であり、さまざまなタイプのものが考案されている。

磁気発電式のLEDライト「ナイトスターJP」は、30秒振るだけで約20分間点灯し、点灯寿命50,000時間、完全防水という性能を持つ。考えられるあらゆる状況下で確実に照明を確保できる懐中電灯である。

「柏葉水電池」は、水に浸すだけで発電する備蓄用の電池で、4~5年(真空パックでは約10年)の保存が可能。連続通電400~1,500時間の長寿命で、ランタン、懐中電灯、救命具などが開発されている。

「スフェラー」という発電効率の高い小さな粒子状の太陽電池素子は、照明器材だけではなく、多用途に使われる開発可能性を秘めている。

「水発電機アクエネオス」は、塩水と触媒のマグネシウムカートリッジを使用して大きな発電能力を持ち、家庭用から事業所の非常(事業継続)用にまで使える。静音、メンテナンス不要などの利点があり、発電能力が高いので、発展の可能性が大きい。

「太い炎のキャンドル」は、炎のサイズを一定の大きさにコントロールして、通常のろうそくの数倍の明るさを確保するだけでなく簡単な調理・湯沸かしにも使える。災害時に備え、複数の手段で照明を確保しておく必要性などから取り上げたロー(蠟)テクの品であるが、米国の燃焼学会で受賞日本の特許3件を取得した技術が適用されている。今回、同社から参考品として出品され

た「燃焼促進剤(焚き火台)」は、燃焼関係の特許8件を適用し、極めて高い燃焼効率を実現したもので、このような優れた技術を発掘することも重視している。

災害時の飲料水の重要性を忘れる人はいないだろうが、生活用水への配慮を怠ってはいけない。

「海へ…Stepポンプ付き」という洗剤は、100%植物由来の洗浄成分で作られているので、すすぎなしで使用可能だ。海洋タンカーの事故処理研究から生まれた。日用品としても災害時にも有益な商品として取り上げた。

「7年保存食3日分セットCompleted Evo 7-Years」は、自衛隊の戦闘糧食を納入してきた実績を持つ企業が売り出した備蓄用食料で、暖かくして食べられるように加熱セットを備えている。20カ国の多言語表示がされ、外国人被災者への対応が配慮されている。

高知県の黒潮町の「食物アレルギー対応グルメ缶詰」を取り上げた理由は、美味しい食物アレルギー対応の優れた備蓄食品だというだけではない。高齢化、過疎化に悩む行政が、予測される高さ34m超の大津波への対応を迫られ、防災と地域活性化を両にらみで追求して開発に着手したところに着目した。全国の多くの地域に共通する課題である。

「非常食用 豆腐ジャーキー」は、高知県にある創業47年の豆腐製造会社が、非常時の栄養のタンパク質不足に着目して開発した備蓄食品である。

「いざという時の梅干し」は、古くから民間療法でもしばしば用いられてきた日本を代表する伝統食品だという点に着目した。

優れた日本の伝統食品を、災害時に有用な食品として見直したいものである。

社会的な意義のあるサービスも取り上げている。

「〈地域貢献型〉災害用備蓄スタンドBISTA」は、その名の通り、来客や帰宅困難者に支援の手を差し伸べるための備蓄BOXとして開発された。

デザイン性に優れているので店舗や事務所に備え、地



災害用備蓄スタンド BISTA



天然ヒノキ香る除菌スプレー



TAKEFUガーゼ「守布(まもりぬの)」



ドライレイヤー ベーシック

域貢献の社会的メッセージとしてもアピールできる。また「共助」の意識を広める意義もある。

これまでの備蓄品は、保管スペースの確保に苦勞し、倉庫の隅に積み上げられて、担当者しか把握していなかったなどという問題があったが、そうした問題点を解消することにも役に立つ。

「天然ヒノキ香る除菌スプレー」は、アルコールの除菌効果に加えて、ヒノキの持つ抗菌効果、消臭効果、除虫効果、リラックス効果を活かした除菌スプレーである。三重県産のヒノキの香りで“安全・安心を実感させたい”という企業のこだわりが、防災の本旨を思い出させてくれる。

一昨年の受賞商品になるが、「TAKEFUガーゼ「守布(まもりぬの)」」は、日本の医療用ガーゼ原料のほぼ100%が外国産だという現状にチャレンジした商品で、天然抗菌、遠赤効果、消臭性、制電性、吸水性、低摩擦性という優れた性質を持つ竹100%のガーゼで、何とか日本産、日本製のガーゼを作りたいという熱い思いを20年かけて実現させた。

このような“こだわり”や“思い”への努力を応援させていただければ有り難いと思っている。

最近、コロナの影響もあって一人でキャンプ気分を楽しむ“ソロキャンプ”が流行っているが、厳しい自然環境にチャレンジするアウトドアスポーツは、被災時の不自由な生活に通じるものがある。

避難所生活に役立つテントやシュラフ、防寒具、マットなどの「アウトドア用品」を取り上げている。日常の楽しみのなかから、非常時の行動を学習することは防災上の意義が大きい。

「ドライレイヤー ベーシック」という肌をドライに保って体温を守る撥水アンダーウェアは、暑い、熱い、冷たい、寒い、乾燥する、濡れる…さまざまな厳しいアウトドアフィールドで性能が実証されたものである。汗を吸汗ウェアへと移行させ、汗冷えを軽減して体力を守るだけでなく、抗菌防臭性を持たせて気になる汗の臭いを抑えている。

避難生活での就寝中の汗冷えによる体調不良などを防ぐ効果が期待できる。

### 時代のトレンド ～災害という変化への対応～

今、国際社会では人為災害や自然災害からの安全・安心の確保、人間の安全保障が焦点になっている。

背景には、確実に進む気候変動というCO<sub>2</sub>削減だけでは解決できない地球規模の問題がある。

その結果、自然環境との調和をキーワードとして、地域との繋がり、伝統の継承と発展、多様性や包括性を重視しながら、私たち自身が“変化”していくことが不可避になっている。

このような時代のなかで多くの人たちは、無意識のうちに、より主体的に生きることを望んでいる。この意識が、自分の好みに合ったライフスタイルの追求、個性発揮を求める姿勢に表れているのだ。

災害という“変化”が日常のものになって、これまで災害時のために備えていたグッズは生活の必需品へと変わっていく。世の中は、“変化”に対応するため、真に役立つ有用なものを必要としている。

### 防災グッズ大賞の将来

防災グッズ大賞展の活動は、災害防止研究所の活動プラットフォームで、モノだけではなくサービスも対象にしている。サービスには、危機に対処する考え方や教訓の普及、フィットネス、“変化”に強いココロの養成を視野に入れている。

まだ身体は小さいが、「夢は大きく」である。

企業の社会的責任(CSR)は企業活動そのものにある。企業価値を追求する営業努力ほど防災意識の普及効果の大きいものはない。

より多くの方々が安全・安心と時代のトレンドを作る活動に参加して下さることをお願いしたい。

災害防止研究所では、ともに活動していく会員を募集しています。  
 Membership会員制度